

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

啓蒙期ウィーンにおける新しい「交際の間」：  
カロリーネ・ピヒラー『時代絵図』を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山之内, 克子, Yamaniuchi, Yoshiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1109">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1109</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 啓蒙期ウィーンにおける新しい「交際の場」

ーカロリーネ・ピヒラー『時代絵図』を中心に

山之内 克子

### 1. はじめに

マリア・テレジアとヨーゼフ 2 世の治世(1740-1790)は、一般にオーストリアおよびハプスブルク帝国の歴史における大きな転換期として位置づけられている。2 代にわたる啓蒙専制君主が段階的に導入した諸改革によって、中世あるいはバロック時代から継承されてきた帝国の政治・経済・社会が、著しい構造転換を強いられた経緯については、すでに多くの先行研究によって明らかにされている。しかし、この変革は、じつは、国家の上部構造のみにとどまるものでは決してなかった。近代化、合理化のプロセスをあらゆる局面において実現しようとした統治者の意図は、当然、臣民の日常生活をもその視野に入れていたからである。

実際、ふたりの君主、とりわけ啓蒙主義を標榜したヨーゼフ 2 世のイデオロギーは、首都の日常生活をその本質から変容させることになった。まず、政府が徹底したかたちで主導した「労働の規律化」は、労働の時空から「非労働」の要素を悉く排除し、新たな時間サイクルに基づいた合理的な生活パターンを定着させた。こうした国家による「規律化」の方向性は、当時、台頭期にあった市民階層の社会的、文化的理想と見事に合致し、「規律」と「勤勉」、「節制」は、労働世界だけではなく、娯楽や祝祭の領域をも支配するスローガンとなっていった。

しかし、その一方で、生活様式の変化は、決してストイックな方向にのみ作用したわけではなかった。労働の集約化と効率化は、新たに「余暇」の概念を生み出した。とりわけ、18 世紀当時、ドイツ随一の大都市として繁栄したウィーンでは、フリードリヒ・シラーがオディッセイアになぞらえて「パエアクス人の国」と呼んだように、楽天的で華やかな余暇の文化が繰り上げられることになった。人びとは、北方ドイツの旅行作家が息をのむほどに贅沢な食生活を享受し、また、ヨーゼフ 2 世が余暇政策の一環として住民に開放した公共緑地では、花火や野外コンサートなど、多様な娯楽の可能性が恒常的に提供されるようになっていた。

「規律に満ちたためぬ労働」、そしてこれを支えるべき「楽しみと教養のための余暇」という、ヨーゼフ 2 世が掲げた新たな国民生活の理想は、緑地のプロムナード、カフェ、サロンなど、旧来の都市が知ることのなかった新しい余暇と娯楽の

場を生み出し、そこでの営みがさらに、首都社会のなかにまったく新しい生活様式と行動規範を根づかせていく<sup>1</sup>。とりわけ市民階層が、これら独自の「余暇の場」を通じて新しい社会的結合の可能性を築いたことは、ウィーンに限らず、全ヨーロッパ的現象として広く指摘されている。「開かれた余暇の場」は、パリやロンドンからハンブルク、ブレスラウにいたるまで、各地において自由で開放的なインターアクションを実現していた。ただし、13世紀以来、ハプスブルク家の宮廷都市として発展し、社会と文化のあらゆる要素が宮廷によってリードされた都市ウィーンにおいては、こうしたプロセスは、ドイツ語圏のなかでも、市民文化の長い伝統を誇ったハンザ都市などとは全く異なった経緯を踏んで進行了はずである。啓蒙君主ヨーゼフ2世が、いわば「上から」導入した「文化改革」は、伝統的な宮廷都市という社会において、いかなる過程をたどりながら、どのような人的結合とコミュニケーションの可能性を切り拓いていったのか。ここでは、その変遷の輪郭線を、ヨーゼフ時代に少女期を過ごし、そののち三月前期にいたるまで、ウィーンのサロン界で中心的役割を担い続けた女流作家、カロリーネ・ピヒラーの作品を手がかりとして読み取っていきたい。

## 2. 「社交」の不在? — 伝統的な人的結合と交際のかたち

「旅するフランス人」を自称して、書簡形式の旅行記を残したドイツ人作家、ヨハン・カスパー・リースベックは、1780年秋、ウィーンに到着して最初の食事を宿屋のテーブルで済ませたとき、この都市の「食事の仕方」を「大変に惨めなもの」と苛評した。この表現は、むろん、食事の内容に向けられた批判ではない。リースベックが驚きの眼で見たものは、上質の食事を前に大テーブルを囲んだ人びとが、互いにひとつも言葉を交わさず、ひとえに「空腹を満たすこと」に神経を集中させるという、異様な光景であった。

「客はみな、食卓の片隅に陣取ると、しばらくの間、ひたすら顎骨と両手を動かし続け、済んだらさっさと支払いをして、この間、全く言葉を発することなく店を後にするのです。まったくもって、当地では、どこの飲食店でも、食堂に響くのはただ、スプーンが皿に当たって立てるカタカタという音、そして客たちの咀嚼の音だけなのです。貴君には判ってもらえると思いますが、私なら、少しも会話に加わることなく食卓を立たねばならないとしたら、ほとんど食べ

<sup>1</sup> 余暇と娯楽、都市における新しい生活様式など、啓蒙期ウィーンの日常史的問題に関しては、以下の文献において詳述した。山之内克子『ハプスブルクの文化革命』、講談社 2005年

た気がしないことでしょう。じつに、ここでは、食事中の会話に税金がかけられているのではないかと思われるほどです<sup>2</sup>

ヨーロッパの諸都市で、宿屋のテーブルで隣り合った他人同士が食事を囲んで打ち解けあい、滞在地に関する有意義な情報交換や気の利いた会話を交わす情景に馴染んできた作家は、こうして、到着のその日にしてすでに、「人間同士の自由で有益な会話に基づく交際のパターン」が、ウィーンでは決定的に欠如していることを強く印象づけられた。

リースベックをはじめ、ドイツ啓蒙知識人にとって、「会話」とは、旧い身分制度の枠組みや宗教的ドグマから開放された「理性的な人間」が、相互に理想的な関係を模索し、確立していくための、不可欠の手段にほかならなかつた。楽しく、礼儀正しく、また有意義な「会話」を積み重ねることによって、対等な人間同士の新しい社交とコミュニケーションの基盤が築き上げられるはずであった。教養ある人びとが、それぞれの考えや情報を「公共的に」交換する行為こそが、トマージウスからカントにいたるまで、啓蒙主義を広く実現するための大前提として考えられてきたのである。ドイツ啓蒙主義は、この意味で、まさに、「談論の文化」を通じて新たな公共圏を構築しようとする試みであったといってい<sup>3</sup>。

しかし、ウィーンにおいて、啓蒙主義者が理想とみたこの「会話」が欠落していたのは、未知の他人同士が出会う宿屋の食卓だけではなかつた。舞踏会や正餐、宮廷劇場の栈敷席など、上流の人びとの集う社交の場ですら、「理性的で有意義な会話」のパターンは全くみられなかつた。貴婦人たちは、せいぜい、今朝方、通いの鬘屋から耳打ちされた、婦人服の流行情報やゴシップを互いに繰り返すことしか知らなかつた。人びとは会話術というものを全く心得ず、関心領域も驚くほど狭いため、たとえ外国から訪れた知識人がその社交の輪に加わることがあっても、会話を高尚な方向に導くことはおろか、かえってお愛想や下品な冗談に巻き込まれることになるのがおちであった。

例えば、フライブルクからウィーンを訪れた作家、ハインリヒ・ザンダーに対して、同郷人、フォーゲル氏なる人物が切々と語って聞かせた底知れない欲求不満は、当時のウィーンにおける「社交」の狭さ、空しさを十分に明証するものである。銀行家フリース男爵のもとに勤仕したこの教養人は、すでに 24 年という長い年月を

<sup>2</sup> [Johann Kasper Riesbeck], Briefe eines Franzosen über Deutschland. An seiner Bruder zu Paris, uebersetzt von K.R., Bd.1, o.O. 1784, S.243

<sup>3</sup> エンゲルハルト・ヴァイグル著、三島憲一ほか訳、『啓蒙の都市周遊』、岩波書店 1997 年、52-60 頁、大貫敦子「排除された『私』の言葉—ドイツ市民社会における公共圏形成の言説とジェンダー」、『思想』2001 年 6 月号、85-86 頁参照。

首都で暮らしながら、自分はどうしてもこの地に馴染むことができない、と嘆いたという。ザンダーによる旅行記の伝えるところによれば、ウィーンの社交界には、飲食や賭博のほかには特段の「楽しみ」もなく、これらの所行に関心のないフォーゲル氏は、日々、孤独感を募らせるばかりであった<sup>4</sup>。

談論や会話を通じて、互いに有用な知識を交換し合い、また、人間同士のコミュニケーションを深めていく社交の様式が、ウィーンにおいてはいまだに確立されていなかった。リースベックやザンダーが、これを「ウィーンの弱点」として浴びせた激しい非難は、当時のドイツとオーストリアの文化的格差に照らせば、十分に理解できることである<sup>5</sup>。作家や出版業者、教養ある商人などが、上層知識人として集約的な交際範囲を形成し、自由な社交を実践するという、ドイツ諸都市の文化的環境に慣れ親しんだ人びとの眼には、「会話」の不在は、まさに耐え難いものとして映ったに違いない。しかし、ここで注意すべきは、首都における社交の状況を憂慮し、批判したのが、必ずしもプロテスタント・ドイツからの訪問者だけではなかったことである。

とりわけ、フェケテ・デ・ガラント伯爵による論評は、長年この都市の上流社会のなかに在った人物の視野から当時の社交の実情を観照する記述として、極めて興味深い。高位貴族の教育機関であったウィーンのテレジアヌムを首席で卒業し、ヴォルテールとも文通をもったという、この才気煥発な人物に<sup>6</sup>、貴族社会の「社交」はいちどたりとも満足を与えたことはなかった。

「社交の集いがあれば、高位の女性たちはみな、多少なりとも魅力的な形を整えて、互いにその美しさを競い合う。しかし、実際、彼女たちから色恋沙汰と賭け事を除いたら、ほとんど何も残らないのだ。誓って言うが、首都の貴婦人のうちで、知識ある、機知に富んだ人物と歓談して一時間以上もちこたえられる者は6人としていないだろう」<sup>7</sup>

---

<sup>4</sup> Heinrich Sander, Beschreibung seiner Reisen durch Frankreich, die Niederlande, Holland, Deutschland und Italien; in Beziehung auf Menschenkenntnis, Industrie, Literatur und Naturkunde insonderheit, Leipzig 1784, Bd.2, S.486f.

<sup>5</sup> 激越なウィーン批判で知られるベルリンの文筆家・出版業者、フリードリヒ・ニコライもやはり、ウィーンの都市社会における会話や議論の欠如について批判している。Friedrich Nicolai, Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz im Jahre 1781, nebst Bemerkungen über Gelehrsamkeit, Industrie, Religion und Sitten, Berlin und Stettin 1783-1796, 4.Bd. S.905f.

<sup>6</sup> Johann Graf Fekete de Galantha, Wien im Jahre 1787. Skizze eines lebenden Bildes von Wien, entworfen von einem Weltbürger, Einleitung von Victor Klarwill, S.7ff.

<sup>7</sup> A.a.O., S.47

「社交の場において、僅かでも理性や博識の痕跡を感じさせるような言葉を耳にすることなどは、絶対にあり得ないことだ。議論に値するようなパンフレットが出版されても、それが話題に上ることはほとんどないし、せいぜい芝居の話がちらほら出る程度である。多くの時間は食べることとトランプ遊びに費やされ、その合間にときどき、衣服の流行に関するお喋りと、それに、パリだったら身持ちの悪い女たちでさえ気を悪くするような下品な冗談が交わされる。こうした淫らな話題も、ここでは、最も高貴な生まれのご婦人方の間に恥じらいや怒りを引き起こすこともなく、平然と受け入れられるのだ」<sup>8</sup>

確かに、当時、ウィーンの貴族社会にも、定期的に小さな社交の集いをもつ婦人たちが存在した。しかし、これらは、同時代のパリにおける上流婦人の哲学サロンからは、あまりにも遠くかけ離れたものであった。フェケテによれば、ここに集ったのは、英国由来のものなら何でももて囃す「アングロマニア」のグループでなければ<sup>9</sup>、たいていは、2、3組のカップルを中心にした、無為極まりない集団にすぎなかった。所在無く、退屈の極限に陥った客たちを、まるでその客間の調度品のひとつででもあるかのようにあしらいながら、互いに囁き合うこれら恋人たちの集いには、居合わせた人びとを対等な存在としてみなし、その間に「理性的な団欒」を達成するという、ドイツ啓蒙主義の黎明期にトマージウスが目指した「会話」と「社交」の理想などは、微塵も見出し得ない<sup>10</sup>。

宮廷都市ウィーンにおける「社交」は、なぜこれほどまでに無意味で空しい営みに終始していたのか。首都の貴族の交際を決して有意義で自由な会話のレベルに到達させることがなかった、その最大の要因のひとつが、じつに宮廷社会の儀式性のなかにあったことを、フェケテは的確に洞察していた。すなわち、ウィーンの貴族社会のカレンダーはつねに、夥しい催事予定によって埋められていた。正餐やレセプション、劇場の初演など、あらゆる種類の行事が夜ごとに繰り返される。しかし、

<sup>8</sup> A.a.O., S.51f.

<sup>9</sup> 1780年代のウィーンでは、一種の英国ブームが起こっていた。英語やイギリス文学に対する関心も高まったが、一般的にみれば、これは、むしろ、イギリス風のファッションや食文化の流行に止まった。Vgl. Johann Pezzl, *Skizze von Wien: Ein Kultur- und Sittenbild aus der josephinischen Zeit. Mit Einleitung, Anmerkungen und Register*, hrsg. von Gustav Gugitz und Anton Schlossar, Graz 1923, S.118 u. 183f.

<sup>10</sup> Fekete, a.a.O., S.49f. トマージウスの「会話と社交の理想」については、ヴァイグル、前掲書、49、58-60頁参照。「社交性は、和やかで落ち着いた交際のなかで他の人びととともに生きようとする、人間に植えつけられ備わった(自然の)欲求である。「日常会話というのは、友達同士や敵同士、あるいはそのどちらでもない見知らぬ者同士の間で交わされるが、これらすべての場合に当てはまるルールは、楽しそうに誠実な好意と尊敬の念をもって、わけへだてなく相手に接しなければならない、ということである」。

人びとがここに参加した目的は、ひとときを楽しみ、仲間と歓談することなどではなかった。ここでの交際の動機とは、まず何よりも、「そこに参加すること」、「自らその場に在ること」への義務感と特権意識であった。そのためだけに、婦人たちはしばしば贅沢なドレスを新調し、半日をかけて化粧や装身具を整えたのである。

「新しい衣装や目を眩するようなダイヤモンド、あるいはその美貌を誇示してしまふと、あとは、まさに死ぬほど退屈するというわけである」<sup>11</sup>

このように、人間同士の親密さ、いわゆる「フマニテート」<sup>12</sup>を一切欠き、著しく硬直化した交際のかたちは、まさに、宮廷社会の形式主義、すなわち、「何を」よりも「いかにして」を重視する伝統的な行動様式のなかで醸成されたものにほかならなかった<sup>13</sup>。宮廷社会とは、まさに権威と位階の明確な視覚化によって特徴づけられた共同体であり、そこでは、社交もまた、つねに位階的顕示行為との関連で理解されていた。誰とともに、どのような催事に参加するかという問題は、宮廷社会内部での個人のランクを決定する一大要因であったのだ。

確かに、ドイツ啓蒙主義の思想家たちは、新しい時代に相応しい人間の行動規範を編み出すに当たって、多くのことを宮廷社会から学び取った。トマージウスもガルヴェも、宮廷社会を、まさしく礼儀作法と社交に関する卓越した模範とみなしていた。そして実際、宮廷で実践され、洗練をみた礼儀作法と礼節こそ、激しい暴力性と混沌が支配した17世紀的世界を、光に満ちあふれた理性の時代へと導くという、彼らの共通の目的にとって、最も有効な媒介となったのである。

しかし、人間同士の関係を穏やかで自制に満ちたものに変える一方で、宮廷の儀礼とは、宮廷社会という巨大な組織内部の位階制度と秩序を維持するために、すべての構成員の行動に一定の法則性を確立することをその第一の目的とするものであった。トマージウスらが生きた17世紀末のヨーロッパ世界にあつては、宮廷における「文明の理想」こそが、啓蒙主義者が規範とすべき唯一の選択肢を意味していたにせよ、宮廷の行動パターンは、本来、彼らが目指した、平等で理性的な人間同士を結ぶコミュニケーションの様式としては、本質的に整合し得ないものであった。

この不整合はすでに、18世紀後半のドイツにおいて、台頭期にあつた新エリート

<sup>11</sup> Fekete, a.a.O., S.51

<sup>12</sup> ハーバーマスはこの語を、ルネサンス・ヒューマニズムとは別の、小家族的親密圏のなかで達成される人間同士の親しい結び合いを意味する語として用いている。ユルゲン・ハーバーマス著、細谷貞雄ほか訳、『公共性の構造転換』、未來社 1973年、69頁および84頁注47参照。

<sup>13</sup> ノルベルト・エリアス著、波田節夫ほか訳、『宮廷社会』、法政大学出版局 1981年、170-171頁参照。

や知識人らによって鋭く感知されていた<sup>14</sup>。礼儀正しきや落ち着いた振舞いなど、多くの理想をなお個々の人間の行動規範として引き継ぎながらも、彼らは、宮廷の「顕示的公共性」に代わる、新たな「市民的公共性」を希求していったのである。この時期、ドイツ各地で、さまざまなアソシエーションや知識人サークルなど、新しい公共性の諸制度<sup>インスティテューション</sup>が成立しつつあった過程については、すでに広く明らかにされてきたところである。そして、この新規の社会的枠組みのなかで、人びとは、宮廷社会の儀式性・形式主義を否定し、新たな「精神的美德」と、それに基づく人間的な交際のパターンを実践しようとしたのである。ウィーンを訪れたリースベックやザンダーが憂慮したのは、まさに、こうした新しい形態の社交がまったくみられないという状況であった。

ウィーンにおける宮廷の影響力を考慮するなら、この都市において、ドイツで実践されつつあった新しい市民的な「会話」や「交際」が積極的に受容されるには、固陋で儀式的・形式的な交際のあり方があまりにも根強く残存し過ぎていたことは、論をまたない。だが、一方で、社交や交際の様式とは、いうまでもなく、それぞれの個人が置かれた社会的環境によって大きく左右されるはずのものである。そして、政治・経済・行政のみならず、文化・宗教・思想の領域においても未曾有の転換期にあった18世紀末のウィーンに関して、人びとの交際という、日常史的細部を正確に再現するためには、当時の都市社会が内包した構成的多重性、重層性を視野に入れることが重要な基礎前提となるだろう。とりわけ、伝統的な宮廷のあり方に激しく反発し、古来の宮廷行事および祝宴を著しく削減したヨーゼフ2世のもとで、宮廷社会そのものがその求心性を急激に喪失しつつあったとき、都市の上層知識人が、「宮廷的」な社交とは別の、新しい交際の様式に対して、一貫して無関心であり続けたとは、到底考えられない。彼らの中には、ドイツ諸都市やロンドン、パリに暮らした経験をもち、各地のカフェやサロンで展開された知的で自由な社交と交際に慣れ親しんだ人びとも多くあった。例えば、ザクセンの名家出身の改宗プロテスタントで、マリア・テレジアからヨーゼフ2世の2代にわたって高級官僚として政権を支えたツィンツェンドルフ伯爵の日記をたどるとき、そこには、ザンダーやフェケテが嘆息した惨憺たる状況とはまったく異なる、新しい社交を実践した人びとの姿が、生き活きと浮かび上がるのだ。

<sup>14</sup> この時期、ドイツにおいて、文学者や哲学者、新興市民階層を中心に、フランス的・宮廷的なものの受容が「文明化」として否定され、その対立概念としてドイツ的「精神文化」が模索された過程については、エアラス著、赤井慧爾ほか訳、『文明化の過程』、法政大学出版局 1977年、上巻、68-113頁参照。



都市の「社交」に関する最も手厳しい内部告発者となったフェケテは、宮廷貴族のサークルに属していた。しかし、ここで、宮廷社会という、狭く限定された交際範囲から、より広い階層へと視点を移すことによってこそ、「社交」や「交際」をめぐる別の状況がみえてくるのではないか。すなわち、国家官僚や新興知識人のグループなど、さまざまな社会層における人びとのコミュニケーションの現実を確認する作業を通じて初めて、宮廷の社交が都市社会のなかでいまだにどれほどの影響力をもち得たのか、また、それがどのような変化の可能性を示しつつあったのかを明察することができるだろう。

### 3. カロリーネ・ピヒラー『時代絵図』とグライナー家のサロン

#### (1) 史料としての『時代絵図』

宮廷の催事については、宮内長官や侍従長が、参加者から進行の流れ、時間割にいたるまで、その具体的細部を計画段階から詳細に記録し、その全体の概要は、『ウィーン日報』紙上にも公表されるのが常例であった。だが、これとは対照的に、個人間での「社交」がいったいどのようにして営まれたのかについて、今日に伝える史料は極めて限られている。知識人のアソシエーションやフリーメーソンのロージュのように、定款をもち、明らかに公共的性格を帯びた集団はともかく、ここに属した人びとがそれぞれの私邸のなかで繰り広げた交際の具体的なかたちについては、実際、いまだに史料的裏づけを欠いたまま、茫漠とした状態に残された部分が多いのである。

ビーダーマイヤー期に活躍し、ウィーン初の女流職業作家として知られるカロリーネ・ピヒラー(1769-1843)が1829年に上梓した『時代絵図』の第1部は、フィクションでありながら、こうした史料上の困難のなかで、当時の社交・交際の実情に光を当てるための、充分に有効な緒を提供してくれる作品である<sup>15</sup>。作家の実父で宮廷顧問官のフランツ・ザレス・グライナーが、その結婚直後から1798年に没するまで、自宅で定期的に開いたさまざまな集いが、都市社会における上層知識人や芸術家の結集地としての役割を果たしていたという事実を考量するなら、ピヒラーの小説作品が内包する文化史的史料としての可能性に、もはや疑問の余地はないだろう。

---

<sup>15</sup> Karoline Pichler, *Zeitbilder*, Wien 1924 (Der 1. Teil erst erschienen 1829)

ピヒラーは、多数の戯曲、小説のほか、4巻におよぶ膨大な回想録を書き残している<sup>16</sup>。従来の文化史研究においては、当然のことながら、文学作品よりもむしろこの回想録により大きな史料的价值が認められ、18世紀末から19世紀前半のウィーンの日常史に光を当てる貴重な一次文献として、すでに広く参照・紹介されてきた。だが、この回想録を歴史史料として用いる際には、それが執筆・出版された三月前期ウィーン特有の、社会的・文化的状況に対して十分に考慮を払う必要があるだろう。回想録の第1巻では、作者の出生以前、母シャルロッテによるマリア・テレジア時代の思い出に始まり、ヨーゼフ2世の治世からフランス占領期にいたる都市生活が詳細に語られている。ただし、作者が筆を執ったウィーン体制期には、啓蒙期の「改革」は、一般に「革命へとつながる危険な要因」として一面的に否定されていたのであり、こうした時代の風潮をそのまま受け入れるかのごとく、ピヒラーもまた、ヨーゼフ時代の社会や思想、風俗に関しては、あくまで懐疑的な眼でこれを回顧しようとする。このような姿勢が果たして作家個人のものであったのか、それとも、メッテルニヒ下の厳しい検閲を通過するための一種の「方便」であったのかについては、なお検討の余地が残されている<sup>17</sup>。いずれにしても、ここでの回想には、確実にウィーン体制と正統主義のフィルターがかかっていることを看過してはならない。

書き手としてある程度の政治的・社会的見解を明らかにすることを余儀なくさせられた回想録とは対照的に、小説はあくまでフィクションであり、とりわけウィーン体制期のような管理と抑制の時代にあつては、その架空の枠組こそが、作家にとってより自由な言説を可能にしたことは、いうまでもない。回想録とほぼ同時期に書かれた中編、『時代絵図』においては、小説=フィクションという文学形態を前提として、当時の慣習や生活の細部が、むしろ中立的な立場からありのままに描写されているのである。作品成立期のこうした特殊な状況からみても、小説中に描かれた人びとの社交生活を、ある程度まで当時の実景を再現するものとして評価することは、歴史家の作業として決して無謀なものとはいえないだろう。

序文によれば、『時代絵図』第1部の着想を、ピヒラーは、偶然手にしたクリスティアン・ブランツによる古い銅版画集、『ウィーンの物売りの声』から得たとい

<sup>16</sup> Pichler, Denkwürdigkeiten aus meinem Leben, 4 Bde., Wien 1844

<sup>17</sup> 回想録におけるピヒラーの立場に関しては、以下の研究も参照のこと。Waltraud Heindl, Caroline Pichler oder bürgerliche Fortschritt. Lebensrealität von österreichischen Beamtinnen, in: Margret Friedrich (Hrsg.), Von Bürgern und ihren Frauen (Bürgertum in der Habsburgermonarchie, Bd.5), Wien Köln Weimar 1996, S.197-208

う<sup>18</sup>。18世紀末にウィーンの都市像を現実色彩に彩ったフープスカートの貴婦人、鮮やかな色合いのフロックに身を包んだ伊達者、あるいはお仕着せ姿の宮廷官吏などが、20余枚の画紙の上に生き生きと蘇るさまを眼にしたとき、作家は、自ら「時代の証人」として、「わたし自身の幼年期から少女時代に当たる、あの時代の特質について、とりわけ、当時、ここ都市ウィーンにおいて、また、わたしの両親の家において、日々がどのように過ぎていったのか、その様子について、些か小母さまふうの多弁でもって語ること」を思いついたのである。

物語の舞台を1770年代末から80年代初頭に設定したこの中編作品は、主人公の少女、ナネットが、ひとりの男性との出会いを通じて精神的成長を遂げる様子を描いた、一種の教養小説である。しかし、作品の主眼は必ずしも、ナネットを巡るストーリー展開には置かれていない。主人公は明らかに若き日のピヒラー自身であり、マリア・テレジアからヨーゼフ2世にいたる変革の時代に、思想、文化、風俗から生活習慣まで、あらゆる領域を巻き込みながら都市の日常空間のなかに展開されていった著しい転換過程を、この人物の視野を借りて回顧することこそ、作家が抱いた構想にほかならなかった。すなわち、登場人物の日常生活を通じて、ここでは、古くからの伝統的な価値観と、ヨーゼフ2世の諸改革や啓蒙思想の伝播の結果として新たに生み出され、受容されていった行動規範との関ぎ合いが、鮮やかな筆致で描出されるのである。

こうした新旧世界のコントラストは、作品中では、とりわけ、ともに首都の上流階層に属したふたつの家族を対照させることによって明示されている。ナネットの父、宮廷顧問官ヘルフェルトと、その知人、レッテンブルク将軍の一家である。夫人同士が折にふれて相互に儀礼訪問を繰り返す様子から、彼らが同じ社会グループ内で、その交際範囲を共有していたことは明らかである。しかし、作品冒頭で描かれる灰の水曜日から復活祭、初夏の湯治と避暑、そして再び謝肉祭<sup>カーニバル</sup>が巡り来るまで、ウィーンの四季折々の年中行事のなかで、ふたつの家族は、つねに接触の機会をもちながらも、互いに全く異なる生活様式と社交パターンを保持し続けるのである。

『時代絵図』におけるふたつの家族の対照的な暮らし方によって象徴されるのは、首都ウィーンの上流階層がもはや単一かつ共通の行動規範をもたないという、著しく不安定な社会文化的状況であった。本来、宮廷社会の儀礼を模範として営まれてきたはずの上層部の社交そのものが、18世紀末において激しい質的变化を遂げつつあった。そこでは、同じ社会層に属する人びとが、互いに異なる規範に従って

---

<sup>18</sup> Vorwort von der Autorin selbst, in: Zeitbilder, S.5f. Vgl. a. Johann Christian Brand, Kaufuf von Wien, Wien 1775/76

コンタクトをもつようなことが、実際に起こっていたのである。ヘルフェルト夫人がしばしば顕す不快や激怒は、こうした礼儀上、交際の価値混乱が、その当然の結果として、さまざまな誤解や気まずさを引き起こしていた事実を暗示している。いずれにしても、ピヒラーが呈示するこのモデルを詳しく検討する作業は、1780年前後にウィーンの都市社会で現実に行進しながら、ドイツ人旅行作家をはじめ、多くの同時代人によって決して認識されることのなかった、「社交」と「交際」の変遷過程の核心に触れるための、有効な手がかりとなるだろう。

## (2) 宮廷都市の古い社交—ヘルフェルト家

『時代絵図』第1部は、灰の水曜日の早朝、宮廷顧問官ヘルフェルト夫人が、四旬節の最初の告解を終えて、娘とともに帰宅する情景から始まる。祈祷書の入った皮袋を運ぶ召使を従えて、ふたりの婦人が足早に駆け込む一家の客間は、金の縁取りをした真紅のダマスク織りの化粧張り壁面と大鏡、同じダマスク張りのソファや、優雅な彫刻が施された大理石テーブルをあしらった、豪華で重厚な造りである。ピヒラーが詳細に描写するこのバロック風の室内装飾は、まさに、ヘルフェルト家の生活様式そのものの視覚的象徴にほかならない。

この家族の、裕福ではあるがあまりにも変化に乏しい日々を描きながら、作家は、これを、18世紀の典型的な「生活リズムの不変性」として表現する。小間使いや、通いの床屋などの業者を除けば、普段、ヘルフェルト家に入入りするのは、聴罪司祭デュルンベルガーただひとりである。宮廷顧問官の日常的な交際は、司祭と家族だけの、閉ざされた、小さなサークルに局限されていたのである。司祭は毎朝ヘルフェルト家を訪れ、一家と朝食をともにし、また、毎週月曜日の夜には、夫妻と3人でトランプ遊びを楽しむのが習慣となっていた。デュルンベルガーとのささやかな交際だけが、宮廷顧問官の単調な生活を秩序正しく区切るメルクマールとして機能していた。

だが、その彩りに欠けた日常の生活パターンとは対照的に、ヘルフェルト夫妻がカトリック宮廷都市の伝統的なカレンダーに即して計画する社交の集いは、まるで宮廷貴族と見紛うほどの厳粛な儀式性に支配されていた<sup>19</sup>。例えば、灰の水曜日、ヘルフェルト家では厳選された精進食が準備され、数人の「旧知の友人」、とりわけ、四旬節用の料理を自宅で用意する習慣のない、独り身の男性たちが招待される。

<sup>19</sup> ヘルフェルトは地方官吏の息子として生まれながら、実力で宮廷顧問官のポストまでたき上げた人物として描かれ、叙爵も受けていない。社会的にみて、典型的な上層市民階級に分類すべき人物といえるだろう。Pichler, *Zeitbilder*, S.9f.

だが、ヘルフェルト夫人による出迎えは、ごく少数の知人を招いた小規模な食事会には不相応に思われるほど、仰々しいものである。すなわち、髪を高く結い上げて、最新流行のアドリエンヌで身なりを整えた夫人は、同じく盛装した娘を傍らに侍らせて、ソファの上で優雅にひとりひとりの招待客を迎えるのである。

一家の女主人が艶やかに「鎮座する」ソファを中心とした、一種の「ミクロコスモス」としての社交の場は、四旬節中の夜の集いにおいて、再び詳細に描写されることになる。6週間の禁欲期間中、人びとは、日曜日の夜の集いのときだけ特別に、コーヒーを楽しむのがならいであったという。

「これらの好ましい夕べの集いには、近しい知人や友人が、一家の主婦がつねに君臨するあのソファの周りに集まって、まずは6日間我慢してきたこの飲み物を満足して楽しみ合い、そしてしばらく後にやがて、トランプ遊びに移るのだった。その様子は、女主人が客間のあちこちに車座を作った小さなグループに代わる代わる加わるといふ、現在のサロンとはまるで違っていた。当時はまだ、(招待客の)男性たちは、ご婦人たちと歓談し、彼女たちを楽しませることを義務と心得ていて、今日のように、窓辺や部屋の奥に突っ立って、自分勝手に男たちだけの集団を作るようなことはなかったのである」<sup>20</sup>

ピヒラーが描くヘルフェルト家の社交は、18世紀後半になってもなお、官僚や富裕な資本家など、首都の上層市民階級の間で、宮廷貴族の儀式性が熱心に模倣されていた現実を反映したものにほかならない。例えば、女主人のソファを中心とする集いは、1760年代にゾンネンフェルスが、自ら編集した道徳週刊雑誌、『偏見なき人』において激しく批判した、貴族文化の「非社交的な行動様式の典型」<sup>21</sup>そのものであった。ゾンネンフェルスによれば、上流家庭での交際はつねに、女主人を唯一絶対の中心として営まれていた。このやんごとなき「女王」は、個々の招待客を、その厳格な身分差にしたがって、それぞれに相応しい儀礼でもって接待したという。

「ある客は彼女に3歩ばかり近寄らなくてはならず、また別の客は1歩に止め

---

<sup>20</sup> A.a.O., S.34

<sup>21</sup> Mann ohne Vorurteil, Jg.2(1766), Quartal 4, St.8 ゾンネンフェルスら啓蒙知識人が1760-70年代にかけて集中的に発行した道徳雑誌は、官僚をはじめとする上層市民や中・下級貴族を読者層として想定し、彼らの間に、排他的・形式的な宮廷貴族文化とは異なる、新たな行動規範と独自の文化的価値基準を形成することによって、これらの社会グループを新しい上層知識階層として結束させるという、明確な意図をもっていた。Vgl. auch: Kai Kaufmann, „Es ist nur ein Wien!“ Stadtbeschreibungen von Wien 1700-1873, Wien Köln Weimar 1994, 133-160, s.a. Wolfgang Martens, Über die österreichischen Moralischen Wochenschriften, in: Lenau Almanach, Jg.1965/66 S.110-121

ておかなければならぬという具合である」<sup>22</sup>

女性客はまるで小惑星群のように女主人のソファを取り囲み、男たちは出窓のニッチや、どこか邪魔にならないような片隅に控えて、女主人のお呼びがあるまでじっと待機する。そして、彼女の合図に従って、客たちは一斉にトランプが準備された遊戯用テーブルに移動するという段取りになっていた<sup>23</sup>。ゾンネンフェルスが素描する、首都の上流社会で毎夜のごとく繰り返された「空しい交際」の情景は、ヘルフェルト家における四旬節の夜の集いと見事に重なり合うのである。

ところで、ピヒラーとゾンネンフェルスが、こうした集いを描きながら、ともにトランプ遊びに触れていることは、決して偶然ではない。カードを用いた賭博は、まさしく、ウィーンの伝統的な「社交」における、人びとの中心的な営みであった。盛装し、厳格な作法に従って挨拶を交わしたあと、参加者たちがともに楽しむ娯楽の可能性は、ほぼカード遊びに限られていた。ペツルも指摘するように、カード賭博は、長年、皇族も含めて、宮廷貴族の親しい集いにおいて、最大の「気晴らし」、「時間つぶし」の手段として親しまれてきた<sup>24</sup>。マリア・テレジアのアパルトマン<sup>25</sup>や、宮廷舞踏会の敷席でも、人びとが席に着く間もなく、まずはカードが配られるのがならわしであった。そして、この習慣は、18世紀後半にいたるまで、高位貴族だけでなく、一部の上層市民のサークルにおいても模倣され、確実に引き継がれていたのである<sup>26</sup>。ヘルフェルト夫人が定期的に参加する「ゲームの夕べ」は、ま

<sup>22</sup> Mann ohne Vorurteil, Ebd. 客の身分・階層によって女主人が対応の仕方を変えるという、古い貴族的な作法についても、ピヒラーは、ヘルフェルト家の日常的情景として鮮やかに描出する。すなわち、四旬節の夕べの招待客に対してはひとりひとりにもったいぶって手を差し出したヘルフェルト夫人は、郊外に住む馬具職人で、一家に夏の別荘を貸すブライセル氏の訪問に際しては、跪かせて裳裾に口づけさせている。Pichler, Zeitbilder, S.34

<sup>23</sup> Mann ohne Vorurteil, Jg.2(1766), Quartal 4, St.9 ゾンネンフェルスはここで偶然にも「窓辺に立つ男客」を描写するが、いうまでもなく、彼らは、19世紀のサロンにおいてみられたとピヒラーがいう、女主人に眼もくれずに男同士で議論に耽る行動様式とは全く無縁の存在であった。

<sup>24</sup> Pezzl, a.a.O., S.122

<sup>25</sup> 皇族および高位貴族の城館には、公式接見用の部屋とは別に、ごく親しい人びとだけを招き入れるための、専用の客室が設けられていた。こうした空間については、エリアス、『宮廷社会』、76-77頁を参照。この、いわば「非公式の客間」において、女帝は曜日を定めて定期的に親族や親しい者だけを招き、「アパルトマン」と称する気楽で寛いだ集いをもっていた。だが、宮廷内の位階が複雑化するにつれ、君主との親密さを象徴する「アパルトマン」への参加資格が、やがて宮廷社会最大のステータスとみなされるようになっていった。「アパルトマン」がハプスブルク家の宮廷社会で果たした役割については、山之内『ハプスブルクの文化革命』、178-9頁も参照のこと。

<sup>26</sup> ウィーンでもまた、公の場で賭博を行うこと、賭博場を開くことは、数多くの法令によって繰り返し禁止されていた。特に、フランツ・シュテファン の死後、マリア・テレジアは、カード

さに、当時の社交の集いのひとつの典型であった。これらの集会の目的は純粹にカード遊びに置かれていたのであり、そこには、啓蒙主義者が志向した「親しい談話」が入り込む余地など、全く存在しなかった。

ペツルは、トランプ遊びに対する熱中が社会に及ぼす最も深刻な影響として、それが、「人間同士の交際の悦び」を決定的に破壊することを挙げている。トランプの是非はともかく、いずれにしても、ヘルフェルト家の日常生活空間に、この啓蒙主義作家が想定したような、人びとの間での親しい会話や穏やかな結び合いの理想そのものが欠如していたことは明らかである。社交の著しい儀式性は、必然的に人びとの親密な交際を遠ざけていた。夫妻が真の意味で日常的に親しくつき合ったのは、デュルンベルガーだけであった。例えば、レッテンブルク将軍の甥、フリッツは、のちに宮廷顧問官自身によって「ヘルフェルト家への自由な出入り」を許されることになる。しかし、この有能な青年は、その後も、あくまで「当時の風習に従って」、「ほんのときたま、しかも何かもっともらしい理由をみつけて」、あるいは「叔父夫妻とともに正式な夜の訪問として」、一家を訪ねたにすぎなかった。ドイツ諸都市ではすでに啓蒙主義の黎明期に現れていた、日時を問わず、いつでも気軽に訪れ、ともに親しく楽しむ、<sup>オフィネクス・ハウス</sup>「開かれた家」の理想など、ヘルフェルト夫妻にとっては想像すら及ばなかったに違いない。

ヘルフェルト家の社交の集いは、儀式性によって参加者とその行動領域を厳しく区切った、狭い社会グループの「閉ざされた空間」にほかならなかった。少数の同じメンバーが定期的集まり、トランプ遊びなど、つねに同じプログラムを繰り返す行動様式は、まさに、宮廷のアパルトマンや、高位貴族による「アセンブリー」と呼ばれた会合そのものである。同じ位階の者同士が結合し、参加を一種の特権とすることで、身分的闕外にある者を完全に排除するという、排他的で不自由な社交の形式は、宮廷貴族に限らず、首都の上流階級の一部において、明らかに強力な規範として機能していた。ヘルフェルトによって象徴されるような、新興のエリート層にとっての位階が、もはや出生や家柄に依拠するものではなく、自らの能力や手腕によって勝ち取られたステイタスであったにせよ、彼らもまた、その身分意識と社会的差異化の手段を、確実に宮廷社会から学び取っていたのである。

ピヒラーがこの裕福な上流家庭を通じて描き出したものは、ウィーンの宮廷的な

---

遊戯のなかで最も偶然性が高く、莫大な賭け金を伴って営まれたハザードを厳禁するが、貴族たちの私邸内の集いでは、引き続きあらゆる種類のゲームが行われていた。ゲームに関しては、Gerhard Tanzer, *Spectacle müssen seyn. Die Freizeit der Wiener im 18. Jahrhundert*, Wien 1980, S.243-256 も参照のこと。

伝統のなかで培われた、旧い社交の典型であった。ヘルフェルト家の客間はつねに、やがて新しい公共圏の形成へとつながる、あの自由で親しい会話とは本質的に無縁の、硬直した、重苦しい雰囲気<sup>27</sup>に包み込まれていた。客間の片隅に忘れ去られたまま放置された、音の合わない古ぼけたクラヴィコードは、まさに、一家の社交の域の狭さ、柔軟性の欠如を暗示している。すなわち、楽神<sup>ミューゼ</sup>もまた、この真紅のダマスク張りの豪華な空間に決して招き入れられることのない客のひとりであったのだ。そして、このような閉塞的な環境は、いうまでもなく、若く多感なナネットの精神を、しばしば、救いようのない抑鬱状態に陥れていた。

### (3) 「話すこと」との出会い—レッテンブルク家

ところが、ヘルフェルト夫人による厳しい守旧的道德観と、このように古風で堅苦しい行動規範に支配されたナネットの生活に、ある初夏の宵、大きな転機が訪れる。復活祭も過ぎ、避暑を前にして慌しく知人たちへの儀礼訪問をこなす母親に伴って、レッテンブルク家の客間に招じられたとき、彼女がそこにみたものは、親しく、生き生きとした社交の空間であった。女性も男性も同じように寛いで語り合い、ピアノの前にはひとりの青年が座って前奏曲を奏でていた。母娘が到着すると、人びとは一斉に立ち上がり、挨拶を交わし、そして間もなく、ナネットがこれまで耳にしたことのないような「会話」が始まった。一同の話題を巧みに導いたのは、ゲッティンゲンでの学業を終え、官職を求めて帰郷したという甥のフリッツである<sup>27</sup>。機知に富み、楽しく心地よい談話は、厳格なヘルフェルト夫人をして、訪問のあとに計画されていた観劇の予定をしばし忘れさせるほどであった。

このような「会話」は、ナネットにとってはまさに未知の体験であった。ヘルフェルト家の社交においては、「談話(Unterhaltung)」という行為そのものがほとんど成立していなかったからである。確かに、教養ある司祭デュルンベルガーが、ときたま、その知識と教示に富んだ意見を開陳しながら、家族に話題を提供することもあった。しかし、こうした「語り」のパターンは、そこに居合わせた人びとがそれぞれの思うことを率直に話すという、啓蒙主義的な「談話」の理想とは程遠いも

<sup>27</sup> ナネットは後に、フリッツの教示を通じて、フランス語による、内容的にも限定された「保守的な」読書趣味を脱し、ゲラートからレッスン、ヴィーラントにいたるまで、ドイツ啓蒙主義文学のスタンダード作品に親しむようになる。彼女を「会話の文化」に引き入れ、一種の「読書指導」を行うことで、この多感だが無知な少女をより高い精神的・哲学的次元へと高揚させていく役割を、まさに、ドイツで高等教育を受け、自ら啓蒙思想の最先端の知的環境に身をおいた人物が果たしていることは、ウィーンとドイツとの文化的コンタクトのひとつのパターンを示唆する設定として、とりわけ興味深い。Pichler, *Zeitbilder*, S.43, S.50



のであった<sup>28</sup>。司祭が語る時、ナネットはつねに、母親よりもずっと熱心に耳を傾けたが、彼女自身は決して「話し手」とはならず、その役割はあくまで「注意深い聞き手」に止まったにすぎない。それだけに、レッテンブルク家への訪問で体験した束の間の「談話」の営み、とりわけフリッツの「会話術」は、ナネットの心に深い感銘を与えたのである。

「この語らいは、彼女の精神を真の意味で開花させた。かつて眼の楽しみ(=視覚的なもの)だけが彼女に与えてきた魂の高揚を、いま、この会話がより完全なものにしようとしていた」<sup>29</sup>

さらに、この新しい「会話の文化」は、ほどなくヘルフェルト家のなかへと導き入れられることになる。儀礼訪問の後、郊外の夏のコテージに居を移していた一家を、レッテンブルク将軍がフリッツを伴って訪れたのである。ふたりの客人は、早速、庭園の一角、家族が囲んだコーヒーのテーブルに招じられ、ナネットは再び、自らの旅について、また、新刊の書物や文学の古典作品について、生き生きと、自然で親しみのこもった調子で談じる、青年の「会話術」に魅了されることになった。

「じつに心地よい談話が、マロニエの木陰に集った小さなグループをにわかに活気づけた...みんなの心がこれほど気持ちよく、生き生きとした状態になるなかで、もはや誰ひとりとして、トランプ遊びを思いつく者などなかった」<sup>30</sup>

レッテンブルク家からの訪問者は、このようにして、食事やコーヒーの後では専ら卓上にカードを並べることしか知らなかったヘルフェルト家の人びとに、初めて「会話の楽しみ」を披露し、体験させることになった。それは、一家の人びと、とりわけ若いナネットにとって、全く新しい娯楽と精神修養の可能性を意味していた。

ところで、ヘルフェルト家におけるバロック様式の客間内装を詳細に描写したピヒラーは、レッテンブルク家に関しても、ひとしく、空間的・建築術的アレゴリーを付与している。将軍は、ウィーン郊外の村落に、「いわゆるイギリス風の趣味に貫かれた」、美しい邸宅を構えていた。なかでも、レッテンブルク邸の最大の魅力として、作家は、その広大な庭園の、緑滴る情景を鮮やかに描き出してみせる。深い木立のなかへと導く、曲がりくねった無数の小道、庭園全体を横切って流れる小川、自然そのものの植栽や、さまざまな点景物。これらは、当時としては最新の、

---

<sup>28</sup> Vgl. Hans Erich Bödecker, *Aufklärung als Kommunikationsprozeß*, in : *Aufklärung*, Jg.2 (1987), Heft 1, S.93ff.

<sup>29</sup> Pichler, *Zeitbilder*, S.44

<sup>30</sup> A.a.O., S.49

本格的な風景庭園にほかならなかった。

庭という人工の空間のなかに山野さながらの野趣溢れる風景を再現するというイギリス式風景庭園が、ルソーの自然観とも関連づけられながら、啓蒙主義のひとつの理想系として熱狂的に受容されていったプロセスについては、いまさら指摘するまでもない。人為を通じて自然を自在に矯めようとした伝統的なバロック式幾何学庭園の理念を否定し、人間と自然の調和を志向する新しい庭園のスタイルは、1780年代のウィーンでもまた、啓蒙主義に傾倒する上流階層を中心に、庭園史を塗り替えるほどの大流行を引き起こしていた<sup>31</sup>。

レッテンブルク将軍が首都にいち早く造成したという見事なイギリス式庭園を、筆者ピヒラーが、古風なヘルフェルト家とは画然たる対照をなすべき、一家の新しい生活様式と価値観の表徴として登場させていることは、自明であろう<sup>32</sup>。そして、ナネットの心を強く惹きつけた親密で自由な会話の形式とは、当時のウィーンで、風景庭園や、郊外の丘陵カーレンベルクの自然環境へと好んで足を運んだ啓蒙知識人が、現実の都市社会のなかで希求しつつあった新たな交際の理想にとつての、まさしく基本的前提なのであった。

レッテンブルク家の交際は、儀式ばった集いのおりを除いてほとんど人の出入りがなかったヘルフェルト家とは、全く違ったやり方で営まれていた。ここでは夫人が社交サークルを主催しており、大勢の客でいつも賑わっていた。その交際範囲は緩やかで広く、彼女の客間では、夫妻の親しい友人のほか、作家や芸術家などの「美的精神の持ち主」、そして、例えば、のちにナネットの嫉妬心を激しく掻き立てることになるドレスデン出身の貴婦人のような、外国からの客人も、つねに温かく迎えられるのである。

「最先端の流行と趣味によって美しく整えられたこの楽しい場所には、ウィーンで知られた多くの芸術家や優れた人物が通ってきた。そのなかには、デニス、アルクシンガー、マスタリエ、ゾンネンフェルスなどもいた。ときおり、グルックが自らピアノの前に座って、クロブシュトックの詩に着想を得た曲を自演することすらあった。画家たちにとつても、ここは、自身の作品を披露する場

<sup>31</sup> ウィーンにおけるイギリス式風景庭園と啓蒙思想の関連については、以下の論文も参照のこと。山之内克子、「庭園としての都市—啓蒙期ウィーンにおける自然観と都市像」、徳橋曜編著、『環境と景観の社会史』、文化書房博文社、2004年、169–200頁

<sup>32</sup> レッテンブルク将軍の風景庭園に対して、ヘルフェルト一家が夏を過ごすコテージの庭は、小規模ながら古風なフランス式幾何学園として描かれている。庭園の形式が、ここで、それぞれの人物の世界観を表すシンボルとして用いられていることは明らかである。Pichler, Zeitbilder, S.47

であり、また、名の知れた外国人が首都を訪れるようなことがあれば、彼らもまた、まず初めにこの家に招き入れられるのだった」<sup>33</sup>

広大な庭園の緑に包まれたレッテンブルク邸を、まさに首都の精神文化の中心地として描くこの一節には、じつは、ここでの議論を、小説家ピヒラーによるフィクションの枠組みから、再び当時の都市社会の現実へと引き戻すための重要な鍵が隠されている。すなわち、レッテンブルク家のサークルの常連客としてその名を挙げられた著名人、首都の知識階層においてつねに中心的役割を担い続けてきたゾンネンフェルスや、当時のオーストリア文芸界を代表する詩人のヨハン・ミヒャエル・デニスとカール・マスタリエ、また、『ウィーン詩神年鑑』の編者としても知られる文筆家、ヨハン・パプティスト・アルクシンガーらは、みな、現実にかつてピヒラーの両親のもとに足繁く通いつめ、夫妻が約 30 年間にわたってその自宅で開いたさまざまな集いに花を添えた人びとにほかならなかった。

『時代絵図』のなかで詳細に描写されるふたつの対照的な生活様式は、18 世紀後半におけるウィーンの上流階級、とりわけ新興エリート層の間に、相反する別の価値観と行動規範が共存した事実を表す図式としてみなし得るものである。そして、レッテンブルク家のサークルでの親密で知的な会話、人びとの自由で屈託のない交際の形式を描き出そうとしたとき、作家はそのための格好のモデルを自身の生活圏のなかに得たのである。すなわち、美しい庭園を見下ろすその客間は、ビーダーマイヤー時代の世界観が構築した、市民的理想の空想図などでは決してない。それは、まさに、作家自身が幼少の頃より親しんで育った、グライナー家の現実の文化環境に関する、文学的レベルでの再現の試みであった。

#### (4) グライナー家とウィーンのサロン

カロリーネ・ピヒラーの父、フランツ・ザレス・グライナーは、1732 年、代々、官僚や官吏を務めてきた一門の長子として首都に生を受けた<sup>34</sup>。その妻、シャルロッテ・ヒエロニムスは、かつて朗読係の侍女としてマリア・テレジアに仕え、女帝が片時も辞去を許さなかったほどの有能ぶりを発揮したという<sup>35</sup>。1765 年にふたり人が結婚した後は、グライナーも妻と同様に女帝の寵愛を受けて、間もなく宮中顧

<sup>33</sup> A.a.O., S.56

<sup>34</sup> フランツの祖父はウィーン市の官吏、父は高位官僚であり、弟ものに官僚の道に入っている。また、作家の弟、フランツ・クザヴァーも官僚となり、カロリーネ自身ものに父の部下、アンドレアス・オイゲン・ピヒラーと結婚することになる。グライナー家の官僚一門としての社会的結合に関しては、Heindl, Caroline Pichler, S.197f. も参照のこと。

<sup>35</sup> Pichler, Denkwürdigkeiten, Bd. 1, S.6ff.

問官のポストを与えられ、とりわけボヘミア・オーストリア司法局の行政分野で強い発言力をもつ、有力な官僚のひとりとして活躍するようになった<sup>36</sup>。

首都の官僚グループにおける中心的な役割に加えて、グライナー自身の文学と音楽に対する情熱、さらに、妻シャルロッテの学問への深い造詣が、夫妻の周りに知識人や芸術家のサークルを形成し、ノイエア・マルクトの豪華な邸宅は、やがて首都の文化的中心地として内外に広く知られるようになった。しかし、実際には、夫妻のもとでは、この場所に転居するずっと以前から、ほぼ毎日のように、演奏会やさまざまな社交の集いが開かれていたという。1770年代末、一家がまだグラーベンに居を構えていた頃の生活を振り返ったピヒラーの筆致は、まるで『時代絵図』におけるレッテンブルク家の描写そのものである。

「生き生きとした芸術の息吹が、わが家を支配していた。わたしたちはいつも詩人たちに囲まれていたし、多少なりとも名前の知れた音楽家や画家、知識人は、ウィーンに来ると、まずはわたしの両親のもとで歓待を受けた。こうしたことで、両親の家は、首都においてどのような名家よりも一段と際立っていたのである。国内外を問わず、新しい文学作品が出版されると、それらはほとんどわたしたちのサークルで紹介され、朗読され、そして論評された」<sup>37</sup>

しかし、当時のグライナー家において注目すべきことは、単に、同家が担ってきた首都における著名人の結集地としての華々しい文化的機能だけではない。教養とよき趣味、さらに広い人的ネットワークをもつグライナー夫妻の「家族の空間」は、職業や身分によって厳密に区分された形式的・儀式的な交際とは全く異なる、新しい社交様式を創出するための、格好の場となったのである。そして、このことは、ここで形成された交際の在り方を、市民階層の新しい社交の一形式として考慮する際に、とりわけ重要な意味をもってくるのである。個人の家のなかで、家族とともに自由に出入りを許された親しい友人が交わりという、いわば、「半公半私」の領域に、彼らのさらなる友人や知人も同様にして導き入れられる。身分や性差、宗派を超えた、これまでになく解放的な交際は、まず、このようにして、家族を中心とするつき合いのなかに、最も進んだかたちで実現されたのである<sup>38</sup>。

<sup>36</sup> 官僚としてのフランツ・グライナーの経歴と業績、また、同時代人による評価については、以下を参照のこと。Roswita Strommer, *Wiener literarische Salons zur Zeit Joseph Haydns*, in: Herbert Zemmann (Hrsg.), *Joseph Haydn und die Literatur seiner Zeit*, Eisenstadt 1976, S.98; *Österreichische Biedermanns-Chronik*, T.1, *Freiheitsburg 1784*, S. 66f.

<sup>37</sup> Pichler, *Denkwürdigkeiten*, Bd. 1, S. 54

<sup>38</sup> 従来の歴史研究は、市民社会における家族文化を分析するに当たって、公的領域から私的領域が明確に分化する過程をあまりにも一面的に強調してきた。これに対して、近年では、家族を

グライナー一家に集った友人たち、知識人や芸術家は、まさしく、幼いカロリーネら子供たちも含めて、家族的で親密なグループを形成していた。例えば、夫妻と最も親しかった詩人、ローレンツ・レオポルト・ハシュカやゴットリープ・レオンは、一時、グライナー家の邸内にとともに暮らしていた。夫妻の主催する文学サークルでの朗読や議論だけでなく、彼らは、子供たちへの外国語教育や読書指導をも喜んで引き受けたのである。カロリーネは、7、8才の頃、ハシュカの指導でゲラートの寓話を暗唱したことや、レオンが姉弟のためにゲーテ作品の一節を朗読したさまを、鮮明に記憶している<sup>39</sup>。そして同時に、一家の交際範囲は、何よりも、これらの「家の友」を通じて、ますます拡大していくのである。すなわち、アルクシンガーやアロイス・ブルマウアーら、首都の人気作家をつぎつぎとグライナー家の客間にいざなったのは、ハシュカその人にほかならなかった。

また、父フランツは、自邸の客間での演奏会に限りない情熱を傾け、1780年代になると、待降節の時期に行われるグライナー家の家庭演奏会は、まさに冬の社交界の中心となっていた。例えば、ここで演奏した音楽家として、グルック、ハイドン、モーツァルトら、ウィーンの錚々たる「楽聖」の名が伝えられている。しかし、これらの演奏会の目的は、必ずしも、ヴィルトゥオーゾたちの名演披露におかれていたわけではなかった。カロリーネや、父の親友で、著名な植物学者のニコラウス・ヨーゼフ・ヤコインの子供たちも、つねにこれらの大作曲家と並んで演奏したのである<sup>40</sup>。例えば、グライナー家の常連客であったモーツァルトは、家庭演奏会を前に、しばしば、数時間に渡ってカロリーネのピアノ練習につき合ったという<sup>41</sup>。

秋の家庭演劇に始まって、クリスマス前のコンサート、<sup>フィラソフ</sup>謝肉祭には「ピクニック」と呼ばれる賑やかな集い、四旬節明けには再び子供たちによるお芝居。ピヒラーが「わが家の楽しい交際のサイクル」として回顧するこれらの営みにおいて、実際にどのような会話が交わされ、また、参加者同士がいかなる関係で結ばれていたのか、

---

中心とする結合が、決して完全に「私的」な、すなわち社会から孤立した「逃避所」ではなく、むしろ、市民階層という新興のエリートが、身分や職業を越えて、全く新しい交際を実践するステージとして機能していたことが指摘されるようになっていく。Vgl. Anne-Charlott Trepp, *Sanfte Männlichkeit und selbständige Weiblichkeit. Frauen und Männer im Hamburger Bürgertum zwischen 1770 und 1840*, Göttingen 1996

<sup>39</sup> Pichler, *Denkwürdigkeiten*, Bd. 1, S. 47ff., u. S. 54f. 当時の教育制度・習慣の枠内では、通常、女子に与えられるはずのなかったような、この一種の「英才教育」が、早くからカロリーネの文学的素養を育んだことはいうまでもない。

<sup>40</sup> カロリーネ自身、当時の人びとをこの演奏会に強く惹きつけた要因が、必ずしもそこで披露された演奏の音楽的レベルや芸術性そのものではなかったことを回顧している。Pichler, *Denkwürdigkeiten*, Bd. 1, S.127

<sup>41</sup> Vgl. Volkmar Braunbehrens, *Mozart in Wien*, München 1986, S.175

その細部を明らかにする史料は、残念ながらほとんど存在しないといっている。しかし、グライナー家の客間が当時の知識階層を魅了して止まらなかった理由が、まさに、職業生活や身分的顕示行為とは全く無縁の親密な空間のなかに、同じ関心領域を共有する人びとが対等集って、共通の話題を気兼ねなく語り合い、また、音楽を楽しみ合うという行為にあったことは、ビヒラーの回想録をはじめ、今日に残された僅かな記録からも、十分に推測できるのである。

フリードリヒ・シュライアーマッハーは、1799年に発表した論考において、新しい時代における人間交際の理想を、「自由な、すなわち、一切の外的要因によって束縛され、規定されることのないもの」と表現した。その上で、彼は、特定部門に専門化された職業生活と、狭く限定的な家庭生活のはざまに、この理想を最も純粹なかたちで実現したユートピアを、当時の市民階層のサロンのなかに求めている<sup>42</sup>。18世紀から19世紀前半にかけて、全ヨーロッパで展開した「サロン」の活動に関して、これを厳密に定義することは、極めて困難な作業である<sup>43</sup>。しかし、少なくとも、このシュライアーマッハーの理論的枠組みを借りるならば、宮廷顧問官として国家行政の分野で重鎮の役を務めたグライナーの自宅で、職業や身分に全くとら

<sup>42</sup> Friedrich Schleiermacher, *Versuch einer Theorie des geselligen Betragens* (1799), zit. in: Heindl, *Gehorsame Rebellen. Bürokratie und Beamte in Österreich 1780-1848*, Wien 1991, S. 277 シュライアーマッハーによるこの議論に関しては、ヴァイグル、「ラーエルのソファ...」、140-143頁、西村稔、『文士と官僚—ドイツ教養官僚の淵源』、木鐸社、1998年、314-316頁も参照のこと。

<sup>43</sup> この問題については、ヴァイグルおよび大貫前掲論文も参照のこと。両研究とも、18・19世紀転換期のドイツのサロンにおいて、女性が担った重要かつ微妙な役割に注目している。とりわけ大貫氏は、サロンの条件のひとつとして、「これを主催する女性が中心的役割を果たしていること」を挙げている(89頁)。グライナー家のサロンについては、この観点からのさらなる検討が必要であろう。というのも、回想録において、ビヒラーは一貫して、「女性は男性の従属物であり、男性に対して補助的役割を果たすべきもの」という、ビーダーマイヤー期の典型的な女性観をもって両親の日常生活を回顧しているからである。こうした視点から、ここでは、あくまで父フランツがグライナー家における社交の主導権を握った様子が描かれ、その一方で、母シャルロッテの自然科学に関する本格的な専門知識や、膨大な読書量については、極めてシニカルな見解が述べられている。だが、実際には、グライナー夫人こそがこのサロンで「中心的な役割」を果たしていたことは、ここに招かれた人びとの日記や書簡が明証するところである。Vgl. Strommer, a.a.O., S.100 例えば、ウィーン滞在中に数度に渡ってサロンに招じられたドイツ系ルター派聖職者、フリードリヒ・ミュンターは、フランツ・グライナーの「重く堅苦しい印象」に対して、その夫人を、「書物への造詣の深さを感じさせる、博識な女性」として描いている。Aus der *Tagebüchern Friedrich Münters. Wander- und Lehrjahre eines Dänischen Gelehrten*, hrsg. von Øjvind Andreasen, Bd.1, Kopenhagen und Leipzig 1973, S.67 ビヒラーの回想録における筆者の19世紀的・ブルジョアのジェンダー観については、Heindl 前掲論文および以下の研究も参照のこと。Antoine Alm-Lequeux, *Karoline Pichlers Denkwürdigkeiten: Ein Selbstbekenntnis?* In: August Obermeyer (Hrsg.), *1000 Jahre Österreich im Spiegel seiner Literatur*, Dunedin 1997, S.66-86

われない、広い社会グループが親しく集い、芸術や文学がその日常を支配する最も重要なテーマとみなされていた状況を、まさにウィーンにおけるサロン活動の萌芽とみることが可能になるだろう<sup>44</sup>。

実際、当時のウィーンではすでに、グライナー家やヤコイン家に限らず、国家官僚や大資本家など、いわゆる首都の「第二の貴族」<sup>45</sup>に属する多くの家族が、宮廷貴族の社会的結合とは本質を異にする新しい交際の場として、サロン活動を盛んに展開していたのである。ペツルは、18世紀後半になって、これらの人びとによるサロン、あるいは「開かれた家」<sup>オッフエニス・ハウス</sup>が、ひとつの社会現象にまで発展していきまをつぎのように描写する<sup>46</sup>。

「高位貴族の会合とは違って、(『第二の貴族』)の社交の集いは、自分たちとは別の社会層に属する人びと、すなわち、叙爵は受けていないが十分に尊敬すべき人びとに対して、決してその門戸を閉ざすことがなかった。この点で、これらの集いは、聡明で理性的な思想を、より多くの人びとに、また、より広い社会階層へと伝播させるために、大いに貢献しているといえる。ここではとりわけ、それぞれの家の女性たちが重要な役割を担っているが、彼女たちはまさに、男性的な思考様式と女性らしい優雅さを兼ね備えることで、その愛すべき魅力を倍増させているのである。…この女性たちは、芸術の神々の学び舎に教えを受けた者にほかならない。彼女らを中心にした交際は、…つねに有意義で、よき趣味に満ちている。これらの家々で開かれる夜の集いでは、トランプで退屈させられることなど、絶対にあり得ない。少しばかりの音楽に、親しみと友情のこもった会話、文学の最新情報、書物や旅行、芸術作品、演劇についての談論。その日の出来事やニュースが機知を利かせて語られ、批評され、考察さ

---

44 シュトロマーの前掲論文は、グライナー家のサロンをウィーン初の文学サロンとして位置づけ、首都において文学を中心に思想、芸術における新たな「よき趣味」を形成する過程に大きく貢献したことを強調している。Strommer, a.a.O., bes. S.108ff.

45 「第二の貴族」(der zweite Adel)という語は、ウィーンにおいて、高級官僚や企業家、知識人などの新興エリートが、たとえ叙爵を経ても、宮廷貴族を中心とする伝統的な上流階級によって決して社会的に受け入れられなかった現象を象徴するものである。これらの社会層は、その後、19世紀にいたるまで、「社会における中二階」という微妙な位置を守りながら、独自の価値観と行動規範を形成していくことになる。Vgl. Ernst Bruckmüller u. Hannes Stekl, Zur Geschichte des Bürgertums in Österreich, in: Jürgen Kocka (Hrsg.), Bürgertum im 19. Jahrhundert, Bd. 1, Göttingen 1995, S.178ff.

46 こうしたサロンのひとつとしてよく知られるのが、ユダヤ人銀行家、アダム・イサク・アルンシュタインの妻、ファニーが80年代末から自邸で開いた集いである。Vgl. Hilde Spiel, Fanny von Arnstein oder die Emanzipation. Frauenleben an der Zeitwende 1758–1818, Frankfurt a.M. 1962

れる。こうした行為こそが、ここでの楽しみを特色づけるのであり、そして、この親しい集いのなかでは、こんな風にして、冬の夜長もあつという間に過ぎていくのだ。ここでは、地元の人、外国出身の人、それに、偶さかウィーンを訪れた教養人もまた、互いに親交を深めることができるのである<sup>47</sup>

確かに、こうした集いはもともと、宮廷のアパルトマンや高位貴族の「アセンブリー」をモデルとしていた。サロンとは、貴族の「社交の集い」を模しながら、富裕な市民階層が、これを習慣として広く社会に普及させたものにほかならない。この意味で、サロン文化を、その後、19世紀末にいたるまでウィーンのブルジョア階層を本質的に特徴づけることになる、「旧支配階層=貴族の生活様式の模倣」のひとつの事例として捉えることも可能であろう<sup>48</sup>。例えば、ピヒラーが『時代絵図』のなかで描いたヘルフェルト家の生活も、まさしく、当時、国家官僚を中心とする上層市民階層において、貴族の社交の儀式性を厳密に模倣した行動様式が、なお強い影響力を保っていたことを示唆するのである<sup>49</sup>。

しかし、この「模倣行為」の過程で、社交の集いが確実にその社会的な機能を転換していったことを看過してはならない。例えば、1995年に編まれた『啓蒙主義事典』では、「サロン」の概念が、次のように解説されている。

「この親密な集いにおいては、人びとは互いの間に交際を育むのであるが、同時にそこでは、検閲(などの管理体制)によって一切妨げられることなく、最新の文学・芸術のテーマを語り、政治的・社会的事件について論議し、また、自

<sup>47</sup> Pezzl, a.a.O., S.145 ベツルもまた、ここで「サロン」という語を用いてはいない。作家はこの種の集いを、「Gesellschaft」という語で呼ぶ。大貫氏は、ドイツの市民階層において、宮廷文化を連想させる「サロン」という語が用いられることは稀であったと指摘するが、こうした表現上の特色は、宮廷都市ウィーンにおいても全く変わりなかった。大貫、前掲論文、89頁参照。

<sup>48</sup> 伝統的支配階層から社会的に完全に閉め出されたウィーンの市民階層が、一方で新たな市民的道德と世界観をその存在意義として掲げながら、他方、その日常生活において、貴族の行動パターンと生活文化を厳密に模倣していった自家撞着は、首都のブルジョア階級の社会的・文化的脆弱さを象徴する特色として、今日の市民研究においてもつねに指摘される点である。Vgl. Bruckmüller u. Stekl, a.a.O.; Franz Baltzarek, Stekl u.a., *Wirtschaft und Gesellschaft der Wiener Stadterweiterung*, Wiesbaden 1975 S. 281ff.

<sup>49</sup> 市民階層出身の高級官僚の間に、日常生活において宮廷風の儀式性を何よりも重んじたグループが実際に存在したことを、ハインドルは、1733年生まれの富裕な国家官僚、ヨハン・ゲオルク・オーバーマイヤー家に関する回想録の分析を通じて裏づけている。Heindl, *Gehorsame Rebellen*, S. 274ff. 例えばこの夫妻は、スペイン風典礼を真似て、互いを「セニョーラ」、「セニョール」と呼び合い、従者たちにはそれぞれを「ドーナヤ」、「ドン」の敬称で呼ばせたという。Vgl. a. Dies., *Bürokratisierung und Verbürgerlichung: Das Beispiel der Wiener Zentralbürokratie seit 1780*, in: Stekl u.a.(Hrsg.), „Durch Arbeit, Besitz, Wissen und Gerechtigkeit“ (Bürgertum in der Habsburgermonarchie, Bd.2), Wien, Köln Weimar, 1992, S.194-202



らの著作を朗読したり、他の参加者の作品を批評したりすることができた。  
...(18世紀の)サロンとは、社会のすべての階層を受け容れようとするものであった。すなわち、そこでは、伝統的な身分の障壁は、もはや重要な役割を果たすことが全くなかった...」<sup>50</sup>

主としてフランス啓蒙主義のサロンを念頭に試みられたこの解説は、グライナー家をはじめとする市民階層のサロン文化を、宮廷貴族の「アセンブリー」から分かつための、確固たる指標を呈示してくれる。すなわち、ウィーンにおいても、一部の家族の間では、自宅に定期的に人を招くという習慣は、もはや、同一身分に属する者による社会的結束行為とは全く違う意図をもって営まれるようになっていた。サロンに関するペツルの描写にも明示されているように、そこでは、「差異を顕示すること」は全く意味をもたず、人びとの営みの中心は、あくまで「対等な人間として親しく語り合うこと」にあった。自宅の客間という、「公」と「私」の境界線が大きく揺らぐ空間のなかに、同じ趣味と関心をもつ人びとを広く受け入れることによって、彼らは確実に、儀式と象徴の伝統とは異質の、理性的な「談論の文化」を醸成していったのである。首都のサロンの女主人たちがそなえもったとペツルがいう、「男性的な思考様式と女性らしい優雅さ」とは、まさに、合理性と親密さという、18世紀のサロン文化の本質的特徴を象徴する表現にほかならない。

だが、すでにふれたように、こうしたサロン活動の具体的細部を復元することは、史料的に極めて難しい。ツィンツェンドルフ伯爵はじめ、同時代の啓蒙知識人による日記にしても、サロンを舞台とする交際のあり方についての記録は、全く断片的なレベルに止まっているからである。サロンでの交際とは、宮廷儀式の祝祭性とはまるで対照的に、日常生活の一部として展開されたものであり、ウィーンの都市空間のなかに生活世界を有した人びとにとっては、特記に値する対象とはならなかったのかも知れない。それだけになおさら、自身、こうした日常のなかに身を置いてきたピヒラーが、『時代絵図』のなかで再現する人びとの会話や所作は、たとえ現実の記録ではないにせよ、サロンという私的親密圏を舞台に展開された、自由で開かれた社交と交際の細部を知るための、きわめて貴重な手がかりとなるのである。

#### 4. おわりに

『時代絵図』では、厳格な母親のもとで営まれる単調な日常生活のなかで、読書

---

<sup>50</sup> Werner Schneiders (Hrsg.), Lexikon der Aufklärung: Deutschland und Europa, München 1995, „Salon/Club“ von Ulrich Dierse, S. 365

内容、交際範囲、そして結婚相手までも定められ、それを厭わしく感じながらも、自らの力で思考し、語り、行動する術を知らなかった少女ナネットが、レッテンブルク家の人びと、とりわけフリッツに導かれ、やがて豊かな教養をそなえたひとりの知的女性として見事な成長を遂げる過程が、ピヒラー特有の、甘美な少女小説風の筆致で描き出されている。だが、登場人物の性格描写やプロットの展開など、あらゆる点からみて、ドイツ教養小説の系譜のなかに位置づけるにはあまりに拙いこの作品を、歴史家は、単なる架空の物語として捨て置くことはできないだろう。ナネットの人間の発展の背後には、18世紀後半のウィーンで確実に進行していた社会全体の成長過程が、フィクションを支える縦糸として、丹念に織り込まれているからだ。すなわち、ナネットという人物がたどる人格形成のプロセスは、まさに、身分制度の伝統によって醸成された、硬直した人的結合のあり方を脱却して、洗練された人間らしい談論の文化を身につけ、実践しようとする社会そのものの変化を象徴するのである。

宮廷都市ウィーンでは、確かに、18世紀末になっても、多くの上流人士の社交において、なお宮廷的な顕示行為が中核的な位置を占めていた。しかし、その一方で、一部の貴族や上層知識人たちは、サロンをはじめとする自宅での集いという、現代ならば「私的領域」と呼ぶべき限られた空間の内部で、確実に、貴族と市民が、官僚と芸術家が親しく語り合うための、新しい行動様式を生み出そうとしていた。当時、グライナー一家ばかりでなく、モーツァルトの支援者として知られるトゥーン伯爵夫人、また、鉱物学者・宮廷顧問官で、フリーメーソンとしても名高いイグナーツ・フォン・ボルンらもまた、自らの客間を同じ志をもつ人びとに広く開放し、首都における知識と文化の交流ネットワークを確立しつつあった。

こうした上層知識人の「開かれた家」<sup>オッフエネス・ハウス</sup>とは、フリーメーソンのロージュと同様、啓蒙専制主義下のさまざまな政治的・社会的制約のなかで、極めて限定的なかたちで首都ウィーンに成立した公共圏の萌芽にほかならない。もちろんこれらは、社会全体を突き動かす原動力となるには、あまりにも脆弱に過ぎ、また、その本質は曖昧模糊として、一貫性に欠けていた。しかし、それでもなお、これらの「場」のなかに開かれた新たな人的接触や社会的活動の可能性は、当時のハプスブルク帝国において、少なくとも特定の社会グループの内部での身分的境界が徐々に流動的になり、伝統的な支配制度や社会・経済構造の基礎がしだいに変質をきたしつつあった事実の表徴としてみなし得るのである。

しばしば指摘されるように、オーストリア啓蒙主義の本質的特徴は、その主眼が、抽象的な理論や思想ではなく、まず何よりも実践面に置かれたことにあった。この

新思想の担い手となった新興エリート層の関心は、哲学的議論よりはむしろ、近代化の具体的な諸段階を推し進めるために、啓蒙主義の実際的なノウハウをいかに適用していくのか、その方法論に集中したのである<sup>51</sup>。この国の啓蒙期が、フランスやドイツのように、のちの思想史・文化史の発展過程をも大きく規定するような、華々しい哲学者や理論家、文学作家を生み出さなかったことの最大の要因も、この点にあるといつていい。実際、18世紀のウィーンが、大作曲家たちのめざましい活躍とは対照的に、文学・哲学の分野でのすぐれた事跡を欠いていることは、オーストリア啓蒙主義に対する過小評価にもつながっている。確かに、グライナー家やボルン家、トゥーン家のサロンで中心的人物として活躍したハシュカ、デニス、ブルマウアーにしても、今日のドイツ文学研究においてほとんど言及されることのない、忘れられた作家群にすぎない。しかし、このような、実践的側面に中心をおいた啓蒙主義のあり方を視野に定めるとき、斬新な思想史の展開や華々しいカリスマ的人物の活躍ではなく、例えば、社交や交際のパターンのような、人びとの日常的な行動様式とその変化の有り様が、18世紀ウィーンの都市文化に歴史的アプローチを試みる者にとって、なおさら重要な意味を帯びてくるのである。

マリア・テレジア以降の改革政治、2代に渡る啓蒙君主が掲げた新規の国家観と臣民像、ヨーゼフ2世が自ら実行してみせた合理的行動規範、そして、ゆっくりと、だが確実に進行する宮廷的・カトリック的伝統の崩壊。ハプスブルク帝国の地理的・歴史的条件や、バロック的精神文化の特徴のなかで、極めて特殊なかたちを取りながら伝播し、実践されたオーストリアの啓蒙主義を、首都の官房学者も文筆家も、決して明快に理論化することはなかった。彼らにとってそれは、イデオロギーというよりは、むしろ、日々繰り返されるさまざまな日常行為に関する、具体的・実際的な行動規範であったからに違いない。こうした規範とは、現実の都市社会の、人びとの日常生活において、いったいどのようなかたちを取って展開されたのか。そのアウトラインは、ここで取り上げた回想録、あるいは回想に基づく小説作品のほか、書簡、日記、旅行記など、同時代人の私的史料のなかに残された痕跡を丹念にたどる作業を通じて、初めて目に見えるものとなるであろう。

---

<sup>51</sup> Vgl. Erich Zöllner, Bemerkungen zum Problem der Beziehungen zwischen Aufklärung und Josephinismus, in: Ders. (Hrsg.), Österreich und Europa, Graz u. Wien 1965